

鈴鹿大学における「地(知)の拠点大学による 地方創生推進事業(COC+)」の取組状況と課題

富本 真理子

要旨

「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」(以降 COC+ と表記)は2015年に文部科学省が公募した事業であり、大学が地方公共団体や企業等と協働して、学生にとって魅力ある就職先を創出するとともに、その地域が求める人材養成のため必要な教育カリキュラムの改革を行い、地方創生の中心となる「ひと」の地方への集積を目的としている。その COC+の三重県での取組みとして、地域イノベーションを推進する「三重創生ファンタジスタ」の養成を掲げ、本学も参加校として協力してきた経緯がある。

本稿は、2019年度で、COC+の補助期間終了を迎えるにあたり、参加校としての鈴鹿大学のこれまでの活動の取組状況と課題について考察することが目的である。

COC+は、県内就職率向上や事業運営に課題はあるものの、県内の高等教育機関との連携、学生にとっても教職員にとっても大きな効果をもたらしつつあることは否定できない。今後、本学ではできない取組みをこの連携に求めていかに効果的に利用していくかが課題である。

2019年に終了するCOC+は高等教育コンソーシアムみえに移管される。その自律的な運営が大きな鍵であり、さらに、今後の社会状況、特に地方の大学経営のあり方や、外国人労働者に関する課題などの社会的な大きな流れの中で影響を受けることは必至である。しかし、この連携は在籍する学生にとって真の価値があり、地方の大学の魅力向上のためにも、持続可能な取組を期待する。

キーワード

「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」、三重創生ファンタジスタ、高等教育コンソーシアムみえ、県内就職率向上、持続可能な取組

1. はじめに

「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」(以降 COC+¹と表記)は2015年に文部科学省が公募した事業で、大学が地方公共団体や企業等と協働して、学生にとって魅力ある就職先を創出するとともに、その地域が求める人材養成のため、必要な教育カリキュラムの改革を行い、地方創生の中心となる「ひと」の地方への集積を目的としている[三

重大学 HP]。

一方で、2016年3月に設立された「高等教育コンソーシアムみえ」は、三重県内高等教育機関相互並びに県内高等教育機関と地域との連携を促進することにより、県内高等教育機関の教育、研究、地域貢献の各機能の向上を図り、人口減少の抑制及び地域の活性化を実現することを目的として設立された。2019年度に、COC+の補助期間終了後、COC+の機能を移転し、高等教育コンソーシアムみえが後継機関として事業を継続することになっている[三重大学地域人材教育開発機構、2017:52]。このような三重県内の高等教育機関と地域との連携に本学、COC+参加校として協力し、活動に参加してきた経緯がある。

本稿は2019年度でCOC+事業の補助期間終了を迎えるにあたり、参加校としての鈴鹿大学のこれまでの活動の取組状況と課題について考察するものである。

内容としては、COC+の取組状況全般（国として、三重県として）について述べ、鈴鹿大学の取組状況について述べる。特に、授業で得た学生からのコメントや事後アンケート等を中心に分析している。また、取り上げた授業は、三重創生ファンタジスタの資格取得のための授業である。

2. COC+の取組状況

2.1 地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）

地方の大学が地方創生に関わることに関しては文部科学省が以下のようにまとめている。

わが国が世界に先駆けて迎えている人口減少・超高齢化社会において、『人口減少が地域経済の縮小を呼び、地域経済の縮小が人口減少を加速させる』ことが危惧され、地方と東京の経済格差拡大が、若い世代の地方から東京圏へ流出を促進しているとの指摘がある。このような人口減少と地域経済の縮小に歯止めをかけ、意欲と能力のある若者が地域において活躍できる魅力ある就業先や雇用の創出等に国と地方が一体となって取り組んでいく必要が、今地方に求められている。地方の未来を担う「ひと」を養成する高等教育機関が、地域の人材需要を的確に把握し、その地域の課題解決の中心的役割を担う人材を育成することは、地域の知の拠点である大学の使命である[文部科学省高等教育局大学振興課、2016:2]。

地(知)の拠点大学による地方創生推進事業 ～地(知)の拠点COCプラス～

平成28年度予算額(案) 40億円(平成27年度予算額 44億円)

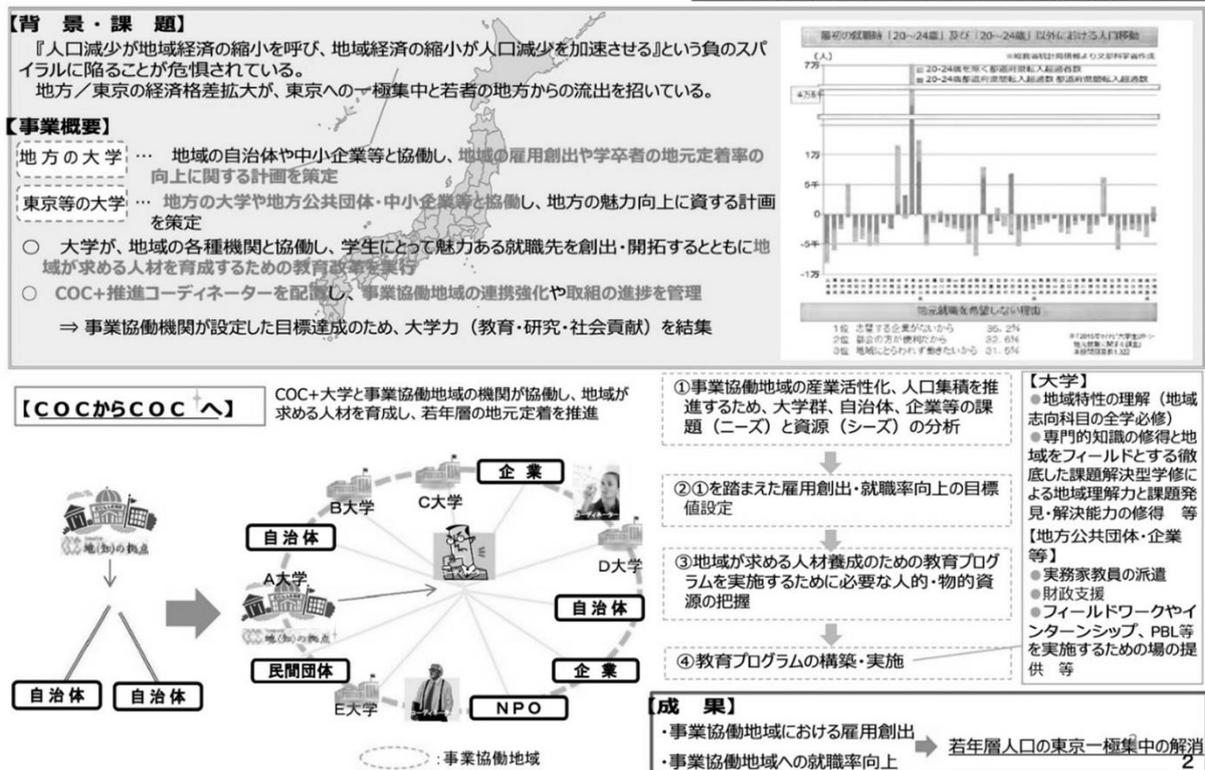


図1. 平成27年度「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」

出典：同パンフレット p.3

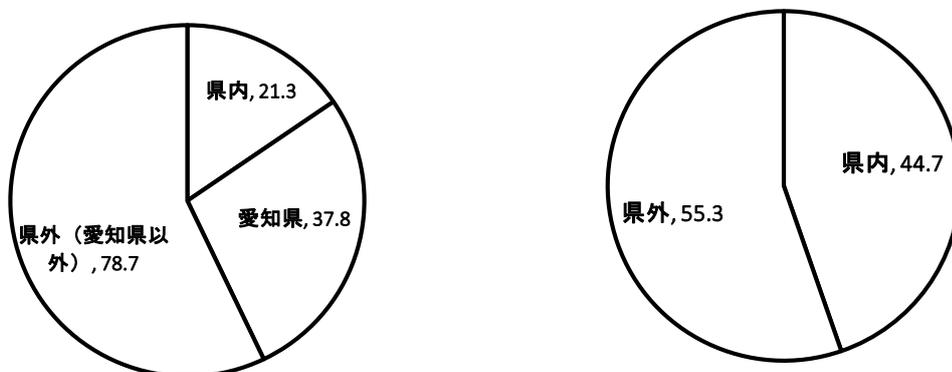
本事業は、2014年に発表されたいわゆる「ローカル・アベノミクス」、または「地方創生」と呼ばれる地方活性化政策の一貫でもあり、地方創生における高等教育機関における人材育成を具現化したものであると言える。

2.2 三重県の人口の社会減の状況

三重県の資料[2017]によれば、1999年以降、概ね転出超過（「社会減」）傾向となっている。2017年の人口移動については、転入・転出超過数は4,063人の転出超過で、その内訳をみると、年齢階級別では15歳～19歳（977人）、20歳～24歳（1,699人）、25歳～29歳（711人）の層で転出超過になっている。大学等への進学時や就職時に県外に出ていく若者が多いことが背景にあると考えられる。

4年制大学に進学した県内高等学校卒業生のうち県内大学に進学した者の割合は約2割となっており、8割もの学生が県外大学に進学している（過去8年間で2割前後を推移）。進学先では、愛知県が約4割、東京圏が1割、関西圏が約2割となっており、この割合は毎年大きな変動はない（図2）。また、2017年度の4年生大学進学時の都道府県別流入・流出率（文部科学省「学校基本調査」）においては、三重県は流出率が全国で最も高く30.8%

となっている。同調査では、東京都は、流入率が72.5%、京都府は、76.2%、大阪府9.9%、愛知県6.5%となっている。



平成 27 年 4 月に大学に進学した
県内高校卒業生のうち、県内大学に
進学した者の割合
出典：文部科学省「学校基本調査」

平成 28 年 3 月に県内大学を
卒業した学生のうち、
県内企業に就職した学生の割合
出典：三重県作成

図 2. 県内大学への進学率と県内企業への就職率
出典：三重県資料「高等教育機関との連携によるみえの地方創生について」
2017 年

このような状況から、三重県では、「若者の県内定着の促進」のための対応が喫緊の課題である。

また、三重県では地方における大学の6つの機能：若者を地域に止め置く機能／良質な雇用を創出する機能／経済主体としての機能／研究成果を地域に還元する機能／教育機関として地域人材を育成する機能／地域の様々な主体のハブとなる機能を期待し、地方創生の実現に不可欠なものばかりであると位置づけている [三重県資料, 2017: 8]。

以上のように三重県では若者の県外流出を抑制するため、地方創生の実現に不可欠な高等教育機関との連携により、若者の県内定着の促進をはかるという戦略をとっていることがわかる。

2.3 三重県内のCOC+の取組

前項で述べたように、転出超過による社会減への対策が急務であることから、2016年3月に県内13の高等教育機関と県が参加し、「高等教育コンソーシアムみえ」を創設、①学生の地域活動支援 ②地方創生に取り組む市町、地域の支援に取り組んでいる。

特に、2016年から2019年度までの4年間は文部科学省の事業である「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」を活用して、FD・SD（教職員研修）、教育プログラムの開発等、県内就職の推進、IR（統計情報の収集、分析、活用）の取組を推進している。具体的には、「次世代産業」「食と観光」「医療・健康・福祉」3分野で活躍できる人材を育成する「三重創生ファンタジスタ」資格認定制度の創設や県内就職率10%向上に向けたインターンシップの充実などに取り組んできた（図3）。

「地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成」に関する説明は以下のとおりである。

平成27年度「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」で採択された「地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成」は、三重県における雇用の創出と若年層の県内就職率の向上につながる持続可能な地域の活性化と開発の方向を「食と観光分野」、「次世代産業分野」、「医療・健康・福祉分野」の3つで捉え、各々の分野をリードできる三重創生ファンタジスタ（状況や事態を的確に把握し、複眼的な視点から柔軟で創造力に富んだ発想と行動のできる人材）を養成することを目的とするものである。具体的には、「地域志向科目群」、「地域実践交流科目群」、「地域イノベーション学科目群」のステージで構成する「三重創生ファンタジスタ」資格認定副専攻コースを展開し、三重県の現状を知り、地域や産業の課題発見と解決方法を、産官学民オール三重体制の中で、今後を展望しつつ、三重県の新時代を切り拓くことのできる人材を育成するものである。[三重大学HP]

本稿のテーマであるCOC+と三重創生ファンタジスタについての若干の説明は図4、5に示している。

なお、参加大学は、以下の通りである [図5. 参照]。

参加大学：三重県立看護大学、四日市大学、皇學館大学、鈴鹿大学、鈴鹿医療科学大学、四日市看護医療大学、鈴鹿大学短期大学部、三重短期大学、高田短期大学、鈴鹿工業高等専門学校、鳥羽商船高等専門学校、近畿大学工業高等専門学校

参加自治体は、三重県であり、参加企業は、アーリーバード、ICDAホールディングス、伊藤工機、医用工学研究所、オズ海島遊民くらぶ。

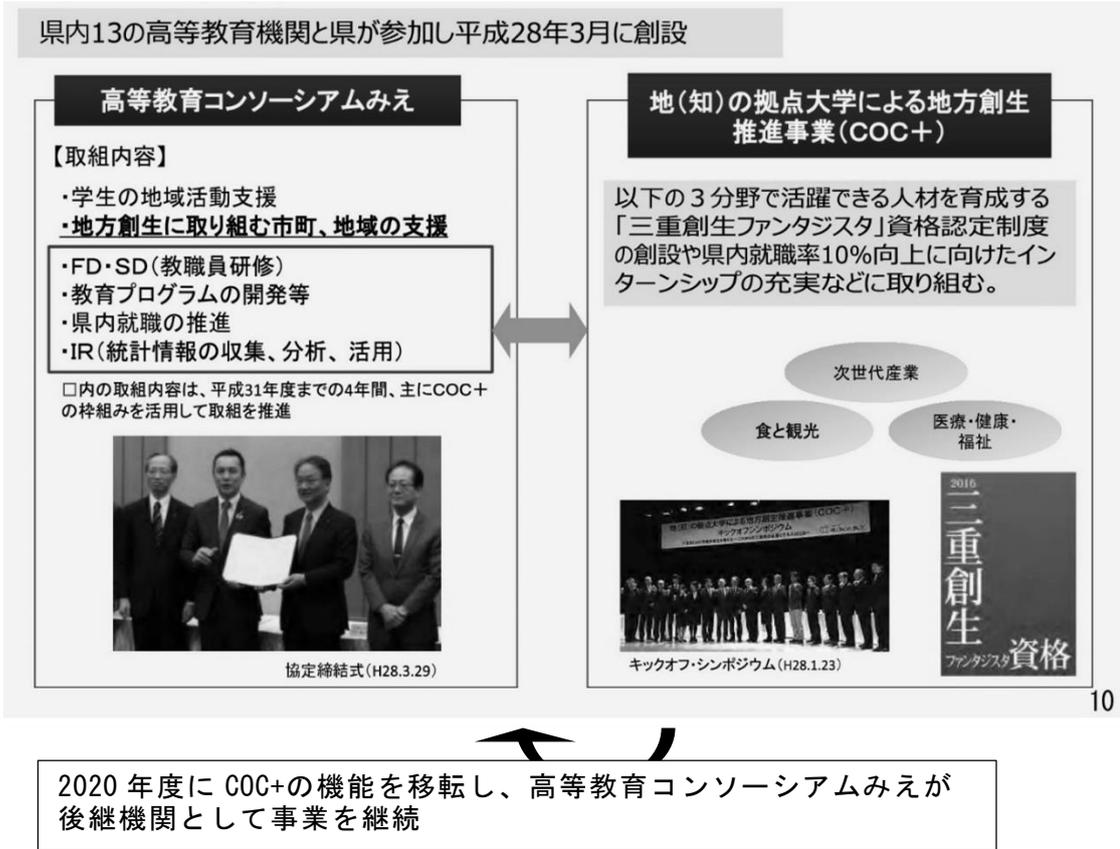


図3. 高等教育コンソーシアムみえ・COC+の関係

出典：三重県作成資料「高等教育機関との連携による みえの地方創生について」2017年

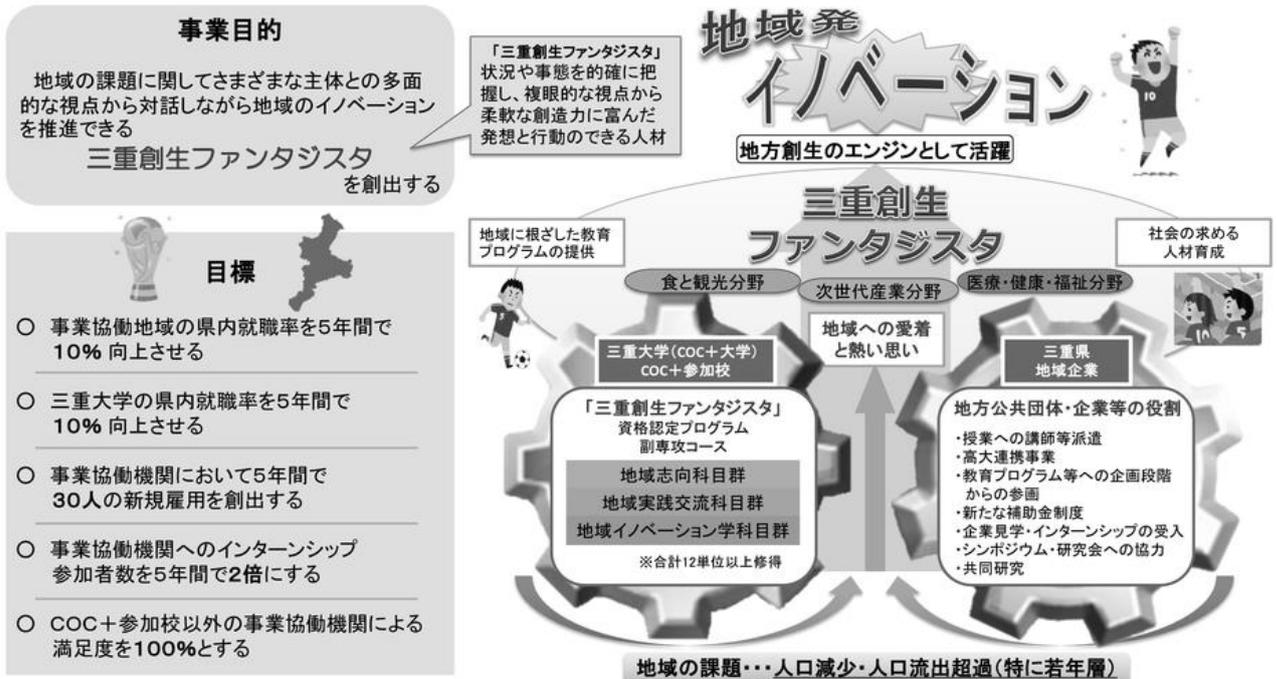


図4. 図解COC+、三重創生ファンタジスタ

出典：三重大学 HP <https://www.coc-all.jp/cocplus/summary/page.php?ID=2213>

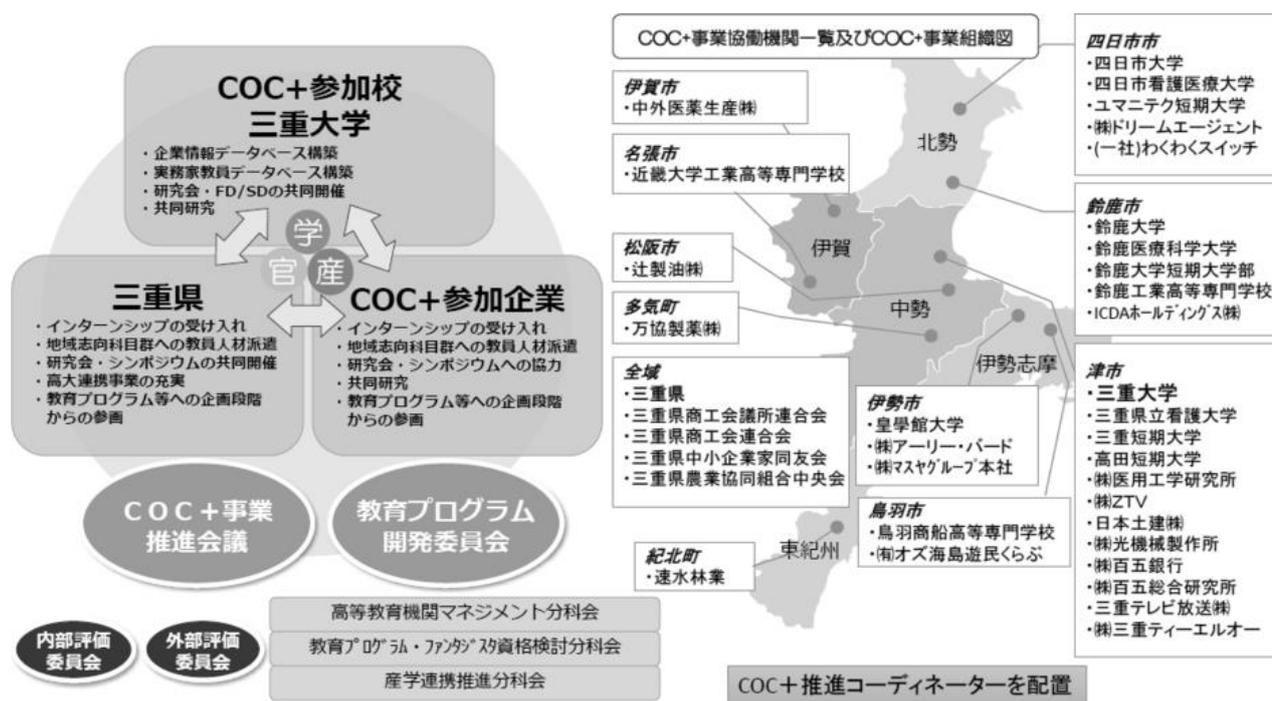


図5. COC+関連機関

出典：<https://www.coc-all.jp/cocplus/summary/page.php?ID=2213>

三重県は、三重大学をはじめ県内高等教育機関が地方創生の中心になる重要な存在であることを踏まえ、その魅力向上・充実に取り組んでいる。県と大学等の連携による地域課題解決に向けた取組をさらに進めるため、安定的な財源の確保が必要であると言われていたが〔三重県資料、2017〕、これは2020年から高等教育コンソーシアムみえの自立化と、COC+事業の継承という大きな課題とともに、引き続き検討すべき事項である。

3. 鈴鹿大学の取組の現状

3.1 鈴鹿大学での三重創生ファンタジスタ周知活動

鈴鹿大学では、県内高等教育機関との協働の活動「高等教育コンソーシアムみえ」や、「文部科学省『地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)』地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成」を推進しているが、実際には、学内および学生に伝わっていないのが現状である。2019年度は、入学時のオリエンテーションで、単位互換科目や三重創生ファンタジスタ資格についての説明をした。また、国際地域学部1年生の必修科目「国際地域概論」第7回では、三重県の観光と関連付けて、これら県内高等教育機関の協働の活動について、詳しく説明した。

以下は、その授業を受けた学生による主なコメントの集約である。

- ・三重県で、就職したいけれど、就職先があるかどうか分からない。
- ・三重創生ファンタジスタの考え方は素晴らしい。私も来年から、その科目をとりたい。
- ・三重県にきたばかりなのでよく知らないがここがすごく気に入っているのので、三重県についての勉強をしたいし、日本全体の社会の課題についてもっと知りたいし、できるなら解決したい。大学内でこの資格を念頭において授業でがんばりたい。
- ・はじめは、東京で就職したいと考えていたが、三重県にきて、住みやすく、物価も安いのでここに住み続けて就職したいと思っている。
- ・三重県で、留学生が就職できる会社はどんなところか知りたい。
- ・他学との授業にも参加したい。
- ・私たち留学生はほとんど、日本の三重県でもどこでも就職したい。
- ・地方の人口減少の中で、こういう取組をやっていることはすごい。
- ・三重県で就職希望していない人には、役立たないのではないか。
- ・三重県で解決していかなければならない問題がたくさんあると思った。三重県内での就職に有利なら三重創生ファンタジスタはすごく魅力的だと思ったし、いろいろな政策が考えられているんだと思った。

当該科目は留学生の履修率が高く、彼らのほとんどは三重県を含めた日本での就職を希望しており、三重創生ファンタジスタの資格については非常に魅力的に捉えられている。一方で、三重県内で留学生を採用する企業の有無、職種、具体的な企業名などについての留学生側の情報不足が明らかになった。

一方で日本人学生については、県外出身者は地元へのUターン志向が多く、また、留学生ビザを持たない外国籍の学生は海外への就職も視野に入れていることがわかった。

これらのコメントから、留学生の三重県での就職希望が多く、その対策が求められていることがわかった。一方で、これら県内高等教育機関との協働の活動は、果たしてそのニーズに応えられているのか疑問が残るのが現状である。この問題は、三重県内のみならず、今の日本の課題でもあり、早急の解決策はないが、彼らが日本社会で生きていけるような力をつけるための教育をしていくことが、本学の重要な努めであることは明らかである。

3.2 鈴鹿大学における授業～三重創生ファンタジスタ資格科目：「モータースポーツマネジメント」～

鈴鹿大学では、地域志向科目として、三重創生ファンタジスタ資格科目群である、「国際地域概論」（1年次配当、必修科目）、「鈴鹿学」（1年次配当、選択科目）、「モータースポーツマネジメント」（2年次配当、選択科目）などがある。その中から、「モータースポーツマネジメント」について、若干の分析と考察を試みる。当該科目は、筆者が担当することや、後述する三重創生ファンタジスタの単位互換科目の作成に協力した経緯から、鈴鹿大

学で可能な範囲でPBL型（課題解決型）のアクティブラーニングをめざしているからである。

「モータースポーツマネジメント」は、2015年4月1日に「鈴鹿国際大学」から「鈴鹿大学」へ名称変更した時に、スタートし、本学が「より地域に必要とされる大学」へとシフトチェンジし、鈴鹿で学べることに力点を置いたことによって開講された科目であり、「モータースポーツを地元でどう盛り上げていくかについて考える」と説明している。日本で唯一「モータースポーツ都市宣言」をした鈴鹿市にとって「モータースポーツ」は、代表的な地域資源であり、鈴鹿市に所在し、「地域志向」を標榜する鈴鹿大学にとって、大学をあげて取り組むべき課題であることが期待されている（富本・郭 2017:290）。

なお、本学で当該科目を担当する教員の専門性の近似値から、観光、地域振興、地域貢献といった視点が、適合しているという判断の下、シラバスを構成している。さらに、鈴鹿サーキット、鈴鹿市役所、鈴鹿市観光協会、鈴鹿モータースポーツ友の会、民間企業等、現場に近い場でモータースポーツに関与する地域の方々をゲストスピーカーとして招聘し、本学教員も交えてのオムニバス形式とした。また、今年度は、鈴鹿サーキットのレーシングコースを見学し、その取材記事を中間課題とした。期末課題で、「モータースポーツを面白くする方策」を課した。さらに、授業終了後となったが、2019年8月22日に、SUZUKA 10 HOURS 参戦車両によるパレードをはじめモータースポーツをより身近に体感できるイベント『鈴鹿モータースポーツフェスティバル』のボランティアも20名程度の学生が参加することができた。そういったことで、フィールドワークやモータースポーツイベントの参加といった、よりアクティブな活動ができたのではないかと考える（表1. 参照）。

表1. 2019年度モータースポーツマネジメント シラバス

（前期火曜日2限（10：40～12：10） 場所：B304 担当：富本・郭

授業科目名	モータースポーツマネジメント
科目担当教員	富本真理子 郭育仁
開講学期	前期
科目区分等 （科目区分、 単位、対象学 年、必修、選 択の別を含む	スポーツビジネス・観光ビジネス領域共通 2単位 国際学科2年 選択
受講人数	122名

授業テーマ		
モータースポーツと地域社会の関係を通して、私たち市民が参画し創造する地域社会の在り方を探る		
授業の目的・概要・授業方法		
<p>目的</p> <p>モータースポーツと地域社会の関係を通して、私たち市民が参画し創造する地域社会の在り方を探り、地域社会に貢献できる能力を身につけることです。</p> <p>モータースポーツとは、人間の筋肉以外の機械的なモーターやエンジンなどの原動機を使用して稼働する乗り物を用いて行われる競技・スポーツで、競技ランクや競技種別ごとに定められたレギュレーションに従い、速さを競う競技を言います。また、実際には陸上を走る四輪自動車やモーターサイクル（オートバイ）などの車輛を使用したものが一般的で、「自動車競技」や「オートバイ競技」を指します。なお、本学のある鈴鹿市は日本で唯一、「モータースポーツ都市宣言」（平成16年12月24日）を行っている市です。</p> <p>概要</p> <p>日本国内唯一のF1日本グランプリを開催する鈴鹿市の地の利を活かし、鈴鹿サーキット、行政、商工会議所、民間団体の有識者や実務家たちから現場の実務を学び、本学スポーツビジネス領域及び観光ビジネス領域講師陣の協働のもとで、モータースポーツに関わる基礎知識と活用事例を具体的に習得していきます。</p> <p>授業方法</p> <p>体験学習、調査学習、コミュニケーションカードの利用などアクティブラーニングを取り入れます。</p>		
授業の到達目標		
<ol style="list-style-type: none"> 1. モータースポーツに関する基礎知識を身につける。 2. 市民としてモータースポーツを通じて、いかに地域社会に参画、創造しうるかを考察できる。 3. モータースポーツマネジメントに関わる地域の諸課題を自ら発見し、その解決策にアプローチする。 		
学習内容		
回	月日	テーマ／講師
1	4/9	オリエンテーション
2	4/16	「モータースポーツとは」鈴鹿モータースポーツ友の会理事長／元レーシングドライバー 畑川治氏
3	4/23	「ラリーマネジメント ラリーにおけるPDCA①」 CCJ 齋藤雅輝氏 スタッフオン 竜田健氏
4	5/7	「ラリーマネジメント ラリーにおけるPDCA②」 CCJ 齋藤雅輝氏 スタッフオン 竜田健氏
5	5/14	「モトクロスの魅力」モトクロスライダー 小島庸平氏
6	5/21	DVD視聴「プロジェクトX 挑戦者たち 制覇せよ 世界最高峰レース ～マン島・オートバイにかけた若者たち～」
7	5/28	「鈴鹿サーキットについて」 鈴鹿サーキットモータースポーツ部 森本純一郎氏
8・9	6/4	鈴鹿サーキット見学
10	6/11	DVD視聴「『不屈の町工場 走れ 魂のバイク』 ～走破せよ 大志への道 プロジェクトX～挑戦者たち～」
11	6/18	「鈴鹿10H」 本学教員 富本真理子
12	6/25	「鈴鹿市のモータースポーツ政策」 鈴鹿市産業振興部地域資源活用課 観光・モータースポーツ振興G 岩崎元紀氏
13	7/2	「鈴鹿8耐の概要とその魅力」鈴鹿モータースポーツ友の会 中野能成氏
14	7/9	「創造型観光からみるモータースポーツ」 本学教員 郭育仁
15	7/16	まとめ
授業外	8/22	鈴鹿モータースポーツフェスティバル 公道パレードサポーター ※当該科目受講生中心に実施。



写真1. 鈴鹿サーキット VIP スイート・プレミアムからの
レーシングコース見学 2019年6月4日筆者撮影



写真2. 表彰台で記念撮影 2019年6月4日撮影

最終日に学生に記述式のアンケートをとったところ、以下のような回答を得た。

①鈴鹿サーキット見学について（2019年6月4日当日は鈴鹿8耐のテスト走行が行われており、バイク走行を観ることができた）

- ・生でバイクがコースを走るのを見て、その音の迫力に、興奮した。
- ・まじかで、展示されたフェラーリが見られたこと、表彰台に上がったことがよかった。
- ・話を聞くだけでなく、実際にみて迫力に驚いた。鈴鹿サーキットがあるから鈴鹿市が有名だということがわかった。
- ・サーキットで先輩が就職していて、実際に働いているところをみて憧れをもった。

②この授業でおもしろかったこと

- ・DVD（10回）をみて感動した。
- ・皆で、サーキット見学がよかった。こんなチャンスはなかなかない貴重な体験である。。
- ・ラリーという初めてきく競技もあり知識が増えた。
- ・実際にレースに関わっている人の話がよかった。
- ・鈴鹿市とモータースポーツの歴史がわかった。

③この授業を受けてよかったこと

- ・見学にも行けたし、モータースポーツの歴史を知った。
- ・モータースポーツの多くがわかるようになった。観光への影響や経済波及効果もわかった。
- ・鈴鹿サーキット見学がよかった。
- ・車やバイクレースの知識が広がったことがよかった。
- ・ラリーやモトクロスなど様々なモータースポーツ競技を知ることができた。
- ・鈴鹿大学ならではの授業、鈴鹿の強みを詳しく知ることができた。
- ・現役選手の話は貴重な機会だった。

④この授業の改善点

- ・世界のモータースポーツについても触れてほしい。
- ・もっと、いろいろな人を呼んでほしい。
- ・実際に、スポーツカーに乗ったり、運転したりする機会があればよかった。
- ・外にでるフィールドワークの時間をもっと、設けてほしい。
- ・動画をもっと増やすといい。
- ・受講生の数を減らしてほしい。

アンケートからみると、この授業はなんといっても鈴鹿サーキット見学が好評であった。テスト走行とはいえ、実際にバイクが走っているところを見るのは、だれもが感動し、国際的なレース場のスケールの大きさに圧倒された。それ以外ではオフロードの現役選手の話聞いて、モータースポーツへの情熱を感じられることも面白かったようだ。また、DVDを視聴して、マン島TTレースや、鈴鹿8耐に何度でも挑戦して、勝利をつかんだ話も感動を呼んだようだ。

授業期間後となったが、酷暑の中、鈴鹿モーターフェスティバルの公道パレードサポーターをしたことも、地域貢献できて満足度が高かったようだ。

期末課題で、「モータースポーツを面白くする方策」を課した結果、以下のようなものがあがってきた。特に、女性がモータースポーツに興味を持てるような提案が興味深い。

- ・モータースポーツに関する映画の製作
- ・三重県の銀行と提携して、モータースポーツをテーマにしたカードの作成

- ・女性をターゲットにしたイベント
- ・女性に対してはレースクイーンならぬレースプリンセス
- ・女性ドライバーのレース
- ・女性が喜ぶような美容、入浴関連でモータースポーツのグッズ開発
- ・量販されているお菓子や清涼飲料水にモータースポーツとのコラボ商品開発
- ・市民全体で取り組めるようなフェスティバルの実施
- ・VR技術を使って家でもリアルなレース体験ができるシステム、個人的には、運転席に自分が座り、レースの疑似体験が可能なシステム

魅力的で実現可能な案は数少なかったが、それでも、15回の授業を経て彼らが真剣に鈴鹿市の最大の地域資源であるモータースポーツについて、考察したことは意義あることだと考える。

3.3 単位互換科目、PBL（問題解決型学習型）授業「食と観光実践」への参加

県内高等教育機関（三重大学、皇学館大学、四日市大学、鈴鹿大学）の教員が協働で構築した授業科目「食と観光実践」は、2017年と2018年は、伊勢・鳥羽・志摩、2019年は熊野市（東紀州）の食文化・観光の現状を知り、課題の抽出や提案を目的とする2泊3日のPBL型集中講義である。表2は2019年度のシラバスである。本学からも毎回3名が参加している。なお、現在COC+オリジナル授業として7つの授業²を位置づけており、当授業はその1つである。これらの7つの授業はコンソーシアムにおける単位互換授業にも位置づけられている。

この授業科目「食と観光実践」は2017年からはじまり、4大学の教員が協働で授業を創設した。三重大学の教員は異動のため入れ替りがあったが、他の3大学の教員は当初から関わっている。参加学生も、4大学（2018年度参加学生実績：三重大学8名、四日市大学7名、皇学館大学1名、鈴鹿大学3名、三重短期大学5名 計24名、2019年度同実績：三重大学22名、四日市大学4名、皇学館大学3名、鈴鹿大学3名 計32名）から、集めている。

専門、年齢の違う教員が協働で行った3年間の取組は、シラバス作成方法、学生への対応、PBL型（課題解決型）授業の手法等、多種多様で相互に刺激をもたらしている。学生にとっても、バックグラウンドや専攻の違う他学の学生と、それほど身近ではない地域においての、体験、合宿、グループ学習、発表と中身の濃いものになっている。

三重大学や三重県総合博物館（MieMu）でのオリエンテーションや座学を実施したのち、各自で熊野市についての基本的な情報収集などを宿題として課し熊野市での合宿に望むという形になっている。

2泊3日の熊野市の合宿では、山間部では、湯ノ口温泉のトロッコ列車体験、紀和鉱山

資料館見学、丸山千枚田見学、熊野市観光協会会長へのインタビュー、海岸部では、梶賀のあぶり商品開発の講話、現地見学、漁業体験（定置網漁法）、グループワークを実施した。

事後学習として、三重大学で「食と観光に関する提案プレゼンテーション」を実施した。

当初は、他学との学生との授業は緊張感を伴い、打ち解けない雰囲気もあったが、回を重ねるうちに、協力しながらグループ学習をすることができた。本学からの参加者も、フィールドワーク等の活動において積極的に関わり存在感を示していた。

表2. 2019年PBL（問題解決型学習型）授業「食と観光実践」シラバス

授業科目名	現代社会理解実践（授業テーマ：食と観光実践）
科目担当教員	東 大史・鈴木 幸子（三重大学）、小林 慶太郎（四日市大学）、池山 敦（皇學館大学）、富本真理子（鈴鹿大学）
開講学期	前期集中 <事前学習2回（5/11、6/15）、現地学習（8/28-30）、事後学習（9/9）
時間数	30時間相当
受講対象学生	学部（学士課程）：1年次以上
人数	25人
授業概要	<p>三重県の重点課題である食と観光に対して、東紀州地域における世界遺産活用の観点から現地でのフィールドワークを交えた体験型実習を行なう。観光地としての魅力発信や観光客向けのインフラ整備といった生活と観光の両立に向けた課題を理解するとともに、古くから親しまれてきた食文化をどのように継承し発展させていくかの考え方を身に着ける。地域産業としての観光業と、地域資源としての歴史文化、そして食の魅力を考察し、提案する機会を設ける。</p> <p>三重県南部に位置する熊野地域は、2004年に「紀伊山地の霊場と参詣道」としてユネスコ世界文化遺産登録され、国内外の観光客に注目されるようになった。毎夏に実施される熊野大花火の際には数多くの観光客が訪れる一方で、冬季など閑散期の需要をどのように伸ばしていくかが課題である。また魚介類や柑橘類など、黒潮が運ぶ高温多湿な気候に育まれた多様な食文化は、高齢化による担い手不足といった社会課題に直面しており、事業承継や商品開発による付加価値向上といった取組みが重要となっている。</p> <p>本科目においては、成長産業に位置付けられる観光業の現状を学び、食や歴史文化といった地域独自の資源と結び付ける考え方を理解するための体系的なカリキュラムを用意している。合宿型のフィールドワークによって地域課題を主体的に考え、グループワークにおいて専門性の異なる他者と議論し、地域の社会人に対してインタビューを行なうといった一連のプロセスによって、地域イノベーションを実践する人材育成を目指す。</p>
授業の到達目標	<p>三重県における社会的事象（観光客誘致、インフラ整備、事業継続性等）を深く理解し、関連する諸分野の知識を統合し、理想的な地域の有り様を探究する。本科目の特徴は合宿型（2泊3日）であり、3～5人のグループワークを通して地域課題（「食と観光」）を発見し、それについて深い分析・考察を加え、その成果を効果的に表現する事で、自らの考えを社会に還元することができる。</p> <p>地域住民や社会人といった異なる立場の人たちにインタビューし、その内容に対してグループ討議を経てそれぞれの専門性に則った意見を述べることで主体性を発揮できる。</p>

学習内容

	○事前学習
1日目	1回目 5月11日(土) 13:00~17:00 @三重大学
13:00	・オリエンテーション(担当:東・鈴木)
13:05	・課題解決の手法を学ぶ講義+グループワーク(山本 裕子)
16:10	・ご当地グルメを活用した町おこしとは?(小林 慶太郎)
2日目	2回目 6月15日(土) 13:00~17:00 @三重県総合博物館(MieMu)
13:00	・ガイダンス(担当:東・鈴木)
13:10	・東紀州の生活と食文化に関する博物館見学(MieMu 太田 光俊 学芸員:1.5時間)
15:00	・講義「三重県南部の食と歴史」(MieMu 太田 光俊 学芸員:1時間)
16:00	・グループワーク(池山 敦:1時間)
	○現地学習(2泊3日)
	合宿(8月28日~30日) 宿泊先:ハマケン水産
3日目	1日目:山間部観光地見学(丸山千枚田・旧紀和鉦山跡地)
8:00	・移動(津⇒熊野)
10:30	・フィールドワーク①(丸山千枚田・紀和鉦山博物館:1.5時間)
12:30	・昼食(地元食材を使った料理)
13:30	・フィールドワーク②(瀬峡・トロッコ列車:1.5時間)
15:00	・講義①「熊野大花火と観光(仮)」(熊野市観光協会 中平孝之 会長:1.5時間)
18:00	・夕食
19:30	・グループワーク(振り返り:1.5時間)
4日目	2日目:沿岸部観光地見学(楯ヶ崎・青の洞窟・七里ガ浜)
8:00	・朝食
9:00	・フィールドワーク③(観光遊覧:1.5時間)
11:30	・昼食
13:00	・食に関するグループインタビュー(二木島・梶賀・新鹿:3時間)
18:00	・夕食
19:30	・グループワーク(振り返り:1.5時間)
5日目	3日目:成果発表会に向けた準備
8:00	・朝食
9:00	・グループインタビュー(3時間)
11:30	・昼食
12:30	・成果発表に向けた取りまとめ(3時間)
15:30	・移動(熊野⇒津)
6日目	○事後学習 9月9日(月) 13:00~16:00 @三重大学
13:00	・食と観光に関する提案プレゼンテーション(3時間)
16:00	・授業アンケート ・事後レポート
	《注意》:現時点での学習内容となり、実際の授業実施に際しては変更の可能性もある。

授業方法の工夫

座学とフィールドワークを融合
受講前後において、学修効果測定(ループリック)を実施



写真3. 定置網漁法の体験 熊野市にて 2019年8月28日筆者撮影



写真4. 漁業者への取材 熊野市にて 2019年8月28日 筆者撮影

以下は、当該授業実施後のアンケートから一部抜粋し集約したものである。なお、アンケートの対象者は、参加した三重大学、皇学館大学、四日市大学、鈴鹿大学の学生である。

①フィールドワークが役に立った点

- ・熊野市を中心に東紀州の現状を知ることができた。
- ・地元の方のお話を聞き、現地に行かないと得られない情報を獲得できた。

②三重を知ることによって、得られた新たな気づき

- ・同じ三重県でも地域ごとに現状はかなり異なること。
- ・抱えている課題が沢山あり、解決策も一筋縄ではいかないことがわかった。
- ・私たちが単純に観光客や住民を増やそうと考えても地域の方は必ずしも全員がそれに賛成でなかった。

③この授業を通して「身についた」と感じた能力

- ・インタビューをする時に、事前に質問リストを作成しつつ、深い話がきけそうならば臨機応変に対応するなどのスキル、コミュニケーション能力。
- ・インタビューの時に、メモをとり、それを後のグループ学習の資料として使うこと。
- ・多くの情報から、テーマにあった必要な情報だけを選び取ること。
- ・可能性がなく無責任な発言にならないよう自分の中でよく考え整理しながら話し合うこと。
- ・みんながとりあえず出した意見をメモし、分類してまとめる作業や、課題解決までの流れに矛盾や疑問点がないよう常に全体の流れを考えながらの作業。
- ・グループのメンバーが、主体的にグループワークを進めていくこと。
- ・時間的制約のなかで、効率良く計画を進めていく工夫をする方法。
- ・課題を見つけ解決策を考え発表するという能力。
- ・情報収集能力、積極性の向上、問題解決に関するスキル。
- ・具体的な問いをみつけるために、抽象的な選択肢から、段々と具体的な選択肢をみんなに委ねることによって、具体的な問いがみんなの了解を得て作り上げることが出来た。
- ・他者と協働活動を行う際に自らの働きかけでグループ内のコンフリクトを解消することができた。

④本科目を他の人にも勧めたい理由

- ・フィールドワークでは、座学では学べないことを体験できるから。
- ・二泊三日で熊野市、尾鷲市の魅力を知ることができ、楽しい。
- ・楽しみながら三重について学べ、単位もとれ、世界が広がると感じたから。

⑤本科目を履修することによって得られる経験

- ・漁業体験、トロッコ体験など自分が普段できないことを体験。
- ・フィールドワークを通して漁師さんや、地域おこし協力隊の本音も聞いたこと。
- ・海、山など素敵な自然に触れ、食を楽しむこと。
- ・地域と食の結びつき、地域の現状、地域おこし、広大な自然と触れ合う機会。
- ・グループでの協調性。グループで一つの課題をこなすこと。
- ・他大学の人との交流。
- ・友人ができる、またいろいろな価値観の人とはなしかうことができる。

⑥課題

- ・スケジュール管理。
- ・グループワークばかりで他の班の子達ともかかわりが持ちたかった。
- ・事前学習とフィールドワークのつながりがあまり感じられなかった。

⑦その他要望

- ・提案に対する現地の方の声を聞きたい。

- ・バーベキューの時間をもう少しください。
- ・グループ発表の準備時間も授業の一貫として取り入れてほしい。
- ・授業終了後も定期的に何らかの形で交流したい。

このアンケートの結果から、当該授業の大きな目標でもある三重県の社会事象について深い理解を得、グループワークを通じて、「食と観光」に関する地域課題を発見、それについて深い分析・考察を加え、その成果を効果的に表現する事で、自らの考えを提案することで社会に還元できた。

さらに、他学との学生とのグループ学習の中で得られた刺激、つながりなども重要な要素となっている。

4. 鈴鹿大学における COC+ の課題

ここまで本稿をまとめてきて、本学国際人間科学部／国際地域学部の授業におけるフィールドワークの機会が、近年減少していることを痛感している。さらに、宿泊を伴うフィールドワークは皆無と言ってよい。予算が限られた中でのその企画立案は困難であるし、在籍学生の経済状況を考えると、学生負担額も限定されることは想像に固くない。しかし、フィールドワークで得られる体験の価値は高く、学生にとっても、興味深いものであることは、明らかである。こういった現状から、参加可能な学生に限定されるものの COC+ のフィールドワークは、他大学との学生の交流という意味で一定の効果がある。むしろ、そういった機会を積極的に利用して、本学でできないことを提供する場として活用すべきと考える。これは、PBL 型授業のみならず、今後展開が期待されているあらゆる単位互換科目についても、積極的な受講促進の手立てを考えるべきで、特に本学でリーダーシップのとれる学生の育成という意味で積極的な利用促進をはかるべきである。ただし、単位互換科目の、本学での受入科目の整備を図る必要がある。現状では、他学まで出向いて授業を受けに行く、時間的、距離的な制約が大きすぎるので休日や長期休暇を利用する集中講義的なものがよりニーズが高いと思われる。さらには、単位互換科目の本学での読替科目の設定なども必要である。

さらに、本学では、三重創生ファンタジスタの資格を認定できておらず、今年度末に向けてそのシステムの構築が必須課題となっている。

一方で、本学は短期大学部と大学との間で地理的な距離が壁にならないので、単位互換の可能性があり、実際、今年度も学生からそのような相談もあった。諸般の事情から、かなわなかったが、今後は、単位認定の受入科目を設定すれば活発な利用が可能である。

また、本学の特色は数多くの留学生が在籍していることである。彼らの存在を活かし、大学の資源とするために、多文化共生の視点や外国籍労働者の視点で、今後、COC+ の中に適宜組み込んでいくことが重要な課題である。

大きな課題として、本学がCOC+に関わる教職員が少なく、すべての分科会や、担当者別の会議に出席できておらず、総合的な活動になっていない。現状では、可能な範囲で関わらざるを得ない。

次に、COC+参加校としての立場で、COC+全体についての課題についてのべる。

1点目は、参加大学間の規模、学生のバックグラウンドが多彩であるために、掲げられた共通の目的が、実情に即していない。

COC+は、「三重県における雇用の創出と若年層の県内就職率の向上」が、その目的である。県内の雇用創出が必須であることは、言うまでもないが、一方で、卒業後の学生の県内就職率は各高等教育機関によって非常に差がある(表4)。県内就職志向で、県内就職率が高い本学短期大学部のような高等教育機関においては、そもそもの目的は達していることから、それほど意味はない。むしろ、魅力ある県内企業の雇用創出が求められていること、あるいは県内就職希望者とのマッチング作業の充実に力点が置かれる必要がある。

表4. COC+参加校県内就職率

高等教育機関名	2017年度 県内就職率 (%)	2014年度 県内就職率率 (%)
三重大学	33.5	33.4
四日市大学	25.0	42.4
皇学館大学	64.9	58.9
鈴鹿大学	51.0	46.3
鈴鹿医療科学大学	44.7	41.6
三重県立看護大学	58.9	51.6
四日市看護医療大学	58.0	65.4
鈴鹿大学短期大学部	94.3	94.4
三重短期大学	61.5	65.4
高田短期大学	98.3	98.3
鈴鹿工業高等専門学校	30.3	24.2
鳥羽商船高等専門学校	15.0	14.6
近畿大学工業専門学校	17.5	22.6
平均値	48.9	49.1

出典：三重大学地域人材教育開発機構「平成27年度大学教育再生戦略推進『地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)』地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成」2019年, p.18

2点目は、卒業後、日本での就職を希望する留学生が多い本学ではあるが、COC+の中では、留学生に関する就職支援といった視点はそれほどはない。今後も、外国人労働者が激増する状況の中で、その視点が無いということは、残念である。

3点目は、単位互換制度について、特に通常授業の場合、公共交通機関が不便で、広範囲な三重県内で、学生が他学の授業を取りに行くことは考えにくい。他府県で実施されているように、駅前の施設などに集約して実施するという方法も考えられるが、南北に長い三重県ではそれも、難しいかもしれない。今後は、前述の「食と観光実践」のように、土日や長期休暇を利用しての集中講義を増やして、単位互換科目とすることが実践的であろう。

5. まとめ

以上、鈴鹿大学における「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に関わる範囲で現状での取組状況と課題と今後の展開についてまとめる。

COC+を本学として活かせる最大のポイントは、PBL型単位互換科目の機会を積極的に利用して、他学の学生との交流をはじめ、本学でできないことを提供する場として活用すべきと考える。その結果、本学では少人数のメリットを活かした学び、単位互換科目では、多様なレベルの学生との学びというように、多彩な学修が期待できる。

COC+の目的である県内就職率の向上に関しては、県内高等教育機関内での県内就職率に差があることから、数値目標として一定の基準値として採用するにしてもそれほど意味がないように思われる。むしろ、魅力ある県内企業の雇用創出や県内企業と県内就職希望者とのマッチング作業の充実に力点が置かれる必要がある。特に、後者のマッチング作業は、学生のバックグラウンドも考慮した県内就職先のきめ細やかな掘り起し作業が必要であろう。

次に、事業運営について、高等教育機関別ごとの特性に相違があり大きな負荷がかかっている。個別の機関では、協働できる項目の選択と集中を行うとともに、全体では多様性を認め寛容性を共有することが必要ではないかと考える。また、単位互換科目については、時間や地理的な制約が一部の集中講義を除けば、学生の参加を阻む要因となっている。

本学では、三重創生ファンタジスタ資格取得のためのシステムの構築や、単位互換科目を学内での受入れ科目の設定など事務的な作業も残されている。

ただし、COC+は、県内就職率向上や事業運営に課題はあるものの、県内の高等教育機関との連携、学生にとっても教職員にとって、一定の効果をもたらしつつあることは否定できない。今後は、さらにその効果を広め、本学単独ではできない取組みをこの連携に求めていかに効果的に利用していくかが課題である。

2019年に終了するCOC+は、今後、高等教育コンソーシアムみえに移管される。その自律的な運営が大きな鍵をにぎり、さらに、今後の社会状況、特に地方大学の経営のあり方

や、外国人労働者に関する課題などの社会的な大きな流れの中で、影響を受けることは必至である。しかし、この連携は在籍する学生にとって真の価値があり、地方の大学の魅力向上のためにも、持続可能な取組を期待する。

注

¹ COC=Center Of Community :とは、文部科学省の大学改革推進等補助金を受けて取り組まれた「地（知）の拠点整備事業」のことである。

² COC+オリジナルの7つの授業とは、2つの座学型講義（三重の歴史と文化、三重の産業）、2つのPBL型集中講義（食と観光実践、次世代産業実践）に加え、平成30年度にはインターンシップ型授業（地域発見型インターン）と柔軟な思考力等を育てる授業（三重の地場産業）を開始した。COC+事務局と各高等教育機関が連携して構築した上記6つの授業に加え、自然を体感する授業（自然環境リテラシー学）である。

引用文献

三重大学地域人材教育開発機構「平成27年度大学教育再生戦略推進費『地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）』地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成」2017年

三重大学地域人材教育開発機構「平成27年度大学教育再生戦略推進費『地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）』地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成」2019年

三重大学 HP : あなたの志をこの地に COC+PORTAL

<https://www.coc-all.jp/cocplus/summary/page.php?ID=2213>

(2019年9月30日最終アクセス)

三重県資料「高等教育機関との連携によるみえの地方創生について」2017年

<https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/wg/7kai/siryoo6->

[2.pdf#search=%27%E9%AB%98%E7%AD%89%E6%95%99%E8%82%B2%E3%82%B3%E3%83%B3%E3%82%BD%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%82%A2%E3%83%A0%E3%81%BF%E3%81%88+COC%EF%BC%8B%27](https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/wg/7kai/siryoo6-2.pdf#search=%27%E9%AB%98%E7%AD%89%E6%95%99%E8%82%B2%E3%82%B3%E3%83%B3%E3%82%BD%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%82%A2%E3%83%A0%E3%81%BF%E3%81%88+COC%EF%BC%8B%27)

(2019年9月30日最終アクセス)

文部科学省高等教育局大学振興課「平成27年度地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」2016年

鈴木英敬（2016）「自立と分散で日本を変える ふるさと知事ネットワーク第10回知事会
合資料」

<https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/wg/7kai/siryo6->

[2.pdf#search=%27E9%AB%98%E7%AD%89%E6%95%99%E8%82%B2%E3%82%B3%E3%83%B3%E3%82%BD%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%82%A2%E3%83%A0%E3%81%BF%E3%81%88+COC%EF%BC%8B%27](https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/wg/7kai/siryo6-2.pdf#search=%27E9%AB%98%E7%AD%89%E6%95%99%E8%82%B2%E3%82%B3%E3%83%B3%E3%82%BD%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%82%A2%E3%83%A0%E3%81%BF%E3%81%88+COC%EF%BC%8B%27)

（2019年9月30日最終アクセス）

富本真理子、郭育仁（2018）：2017年度鈴鹿大学授業科目「モータースポーツマネジメント」の取り組みと課題 ―大学としての地域貢献の視点から、鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要 人文科学・社会科学編 第1号, p. 289-307

国際地域学部国際地域学科 tomimotom@m.suzuka-iu.ac.jp

Activities and Issues in the COC+ project at Suzuka University

Mariko TOMIMOTO

Abstract:

COC +project; The "Program for Promoting Regional Revitalization by Universities as Centers of Community" was publicly offered by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology in 2015. One of the goals of COC + program in Mie Prefecture is to support people to promote regional innovation. Suzuka University has shared the program with other universities of Mie prefecture.

Although there are issues in improving the employment rate in the prefecture, COC + is still becoming effective for students and faculty members in cooperation with other universities in the prefecture.

COC + project will end in 2019 and the functions will be transferred to the Mie Prefectural Universities Consortium.

The future challenge is to effectively use the COC + to enrich education at Suzuka University.

Keywords : COC+project, People to promote regional innovation, Mie Prefectural Universities Consortium, Improvement the rate of employment in Mie, Sustainable activities